

資料

●共同体感覚の歌より

ゲゼルシャフトが契約社会なら ゲマインシャフトは血縁共同体
近代思想はすべてを契約で 割り切ること地獄を創り出す (28)
そういう批判はそれまでにもあって 制度を変革しようと試みた
人の心が変わらぬそのまま 制度を変えても悪くなるばかり (29)
社会制度を変えるその前に 個人の構えを変えなければならぬ
みんながゲマインシャフト感覚を 持つとき制度は自然に変わるだろう (30)
個人が生きる究極目標は 社会の中に居場所を見つけ出し
所属をとげて人から愛されて 仲間と一緒に暮していけること (31)
そのため人はみんなの幸福を 増進するようすべきことをして
みんなの不幸を招かないために すべきでないことけっして手を出さぬ (32)
ゲゼルシャフトがこれらを人々に 強要するなら搾取につながって
個人は人間ではない道具と扱われ 疎外が起って不幸になるだろう (33)
個人がゲマインシャフト感覚を 持ってみずからみんなの幸福に
貢献しようと決心するのなら 人間らしい世界ができるだろう (34)

●Tendentious apperception (復習)

・ p.73 The tendentious apperception is the willingness, after the style of life has developed, to take out of life that which justifies, trains, fits, or increases their beliefs.

偏向した統覚とは、ライフスタイルの発達後、自分の信念を正当化し、訓練し、信念とよく適合し、信念を増大させるものを、人生から取り出そうとする姿勢のことである。

・ Appendix p.553 Tendentious Apperception

The purposeful (usually out of awareness) selection or distortion of experiences according to their

usefulness for the training of, or that which suits, the style of life.

ライフスタイルの訓練のための有用性、あるいはライフスタイルに適合するものに沿って行われる、目的を持った(通常無意識的な)経験の選択または歪曲

●おまけ 文献：セラピストとしてのリディア・ジッヒャー J Individ Psychol . 1978 May;34(1):85-6

導入コメント：リディア・ジッヒャー(1890-1962)は傑出したアドラー心理学の実践家の一人であった。仕事における彼女を知っていた人は、彼女から学んだことへの大きな尊敬と感謝を述べる。しかし、彼女は多くの書評を残した以外に殆ど書物を残しておらず、とりわけ治療については事実上何も書いていない。そのため、彼女のアドレリアン・サイコセラピーのスタイルを個人的に体験して書かれた次の記述は、ユニークで重要な資料と思われる。

この記述は現代の著名な心理療法家である George R.Bach によって書かれた。彼は Creative Aggression と彼が呼ぶ独自の心理療法アプローチを開発した人である。Walter O'Connell への手紙の中で、彼は O'Connell の "bias" の考えと "natural high" 技法を高く評価したうえで、次のことを付け加えた。「ところでアドラーのアシスタントだった故リディア・ジッヒャーは、何年も前に私のアナリストであった。私は彼女の弁証法的ヘーゲル的な心理療法アプローチの影響を受けた。」 私はこの言葉の重要性を理解し、彼にもっと話すよう頼んだところ、彼

は今回の記述を返してくれた。

ここには、ジッヒャーは「決してパンチ（攻撃の手）を緩めない」と述べられている。他のアドレリアンも同様なかもしれない。アドラー自身も確かににそのような戦略を使ったが、我々は彼の全体的トーンは多分もっと柔らかかっただろうと考えている。アドラーは患者への「マイルドな連続質問」について述べたうえで、いつも「患者を自分の誤りを恥じる立場に置かぬよう、機転、アート、仲間の気持ちが必要である」と強調していた。

（Superiority and Social Interest より）

1950年代初めに私がサザン・カリフォルニア大学の Graduate faculty にいたとき、私はポストクのトレーニングと個人的な指導を、今は亡きアドラーの生徒、リディア・ジッヒャーから受けていた。彼女と働いた2年間、理論について議論する多くの機会があった。

私自身は以前、Kurt Lewinのアシスタントをしており、「葛藤の建設的、成長刺激的な機能」という考えに魅力を感じていた。リディアは、「葛藤奨励的な」私のアイデアを、特に集団心理療法や家族療法において実践する手法の開発を後押ししてくれた

どういうわけか彼女は、私、アドラーそして彼女自身の視点を結び付け、「葛藤によって生じる創造的統一」というヘーゲルの根本的哲学概念にそれらの元をたどったうえで、この統一は、「葛藤のない状態」という意味の「解決」というより、むしろさらなる成長への刺激なのであり、その後も続く弁証法的プロセスの一部なのだとして述べた。リディアは他の研修生／患者と私に対して、決してひるまず、パンチの手を緩めないことでこれを実践した。彼女はいつも、真実や社会的現実、あるいは彼女の「弁証法的」セラピーの最中に私が提示する思考や行動やアイデアの倫理的責任を、私に課すことを迷わなかった。

これはリラクセーション的な治療ではなかったし、「無条件のポジティブなまなざし」は彼女にはなかった。ストレスフルな治療であったが、しかし決して実りのないものではなく、いつもリアルな、本心からの、真実志向的なものであった。当然、傷つく治療ではあったが、その傷は良い変化へのシグナルとなった。当然、いつでも好きだったわけではないが、振り返ると、25年たった今でも、成長の刺激となるこの重要なプロセスに恩義を感じている。私自身の創造性はあのかきあそこで始まったし、私の最も重要な貢献—葛藤とアグレッションの創造的使い方を人々に示すこと（6つの書籍や数多くの記事、講演、ワークショップで示しているように）—さえ、そこで始まったのだ。私の"creative aggression"アプローチは、リディア・ジッヒャーがアドレリアンセラピーや専門家教育を行っていた方法から、いくらかの種をもらっているのである。